明治卅六年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回二日發行

堺枯川編輯

家庭雜誌

第七號

明治三十六年十月二日發行

家庭の道德（石川三四郎君）……一
結婚に就ての所感（田川大吉郎君）……三
盆栽に就ての所感（生島無待菴君）……六
女皇陛下万歲（加藤眠柳君）……一〇
虫のはなし（寒川鼠骨君）……一四
家内の送り迎へに就て……一六
冷水浴に就て……一七
花と家庭（久保二葉）……一七
秋まく草花……一九
倫敦雜話（犬塚武夫君）……二〇
偶感（枯川生）
長子相續法……二三
夫に不正の行爲ありたる塲合……二七
家庭文庫
驪語（黑馬ものがたり）……三一
結核征伐……三二

由分社
東京市京橋區新港町一丁目十七番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●本社取次書籍目録

本社に於て取次販賣を爲す書籍は、本誌の讀者諸君に限りて特に**定價の一割引**にて御求に應ずる事と致します。但し郵券代用にて御送金は御斷致す

▲家庭の新風味（堺枯川著） 全六冊合本、定價一圓、郵稅八錢。

▲第一冊、家庭の組織（結婚論、夫婦論、家族論。附錄、春風村舍の記）▲第二冊、家庭の事務（秘書官として、大藏大臣として、內務大臣として。附錄、由分子禁烟の歷史）▲第三冊、家庭の文學（新聞、雜誌、書籍、日記、手紙、和歌、俳諧）▲第四冊、家庭の親愛（夫婦の間、親子の間、家族の間。附錄、毛皮裏の外套、愛犬黑）▲第五冊、家庭の和樂（食卓、來客、宴會、散步及出遊、遊戲、小供及老人、家畜及庭園。附錄、當世紳士、藤室牧師の家庭）▲第六冊、家庭の教育（妻の教育、家族の教育、子の教育。附錄、極樂寺谷の晝飯、顏を美しくする法、補遺）

▲家庭夜話（堺枯川編輯） 全三冊合本、定價一圓、郵稅十錢。各冊三十五錢、郵稅四錢。

▲第一冊、子孫繁昌の話（堺枯川譯述、原作は佛國最近の小說大家ゾラの理想を發揮したるフルートフルネス）▲第二冊、質素儉約の話（加藤眠柳譯述、原作は有名なる英國の文人ゴールドスミスの第一の傑作たるヴイカ、オブ、エーキフイルド）▲第三冊、仁慈博愛の話（志津野又郎譯述、原作は米國ストー夫人が無限の同情を注ぎたる奴隸談、アンクル、トムス、ケビン）

▲我家の犬猫（動物虐待防止會叢書第一篇） 定價八錢、郵稅二錢。（此書に限り郵券九錢にて御註文に應ず）

▲枯川隨筆（家庭文學第一篇） 定價廿五錢、郵稅二錢。

▲言文一致普通文（堺枯川著） 定價廿五錢、郵稅二錢。

右以外の書籍に對しては取次を御斷り致す旨前號に廣告して置きましたが、それにも係はらず猶御注文あるに依り、止むを得ず、今般は何の書籍にても取次することと致しました然し右以外の書籍に對しては**割引なし**

●本誌定價及廣告料

▲定價 一冊六錢、半年分前金卅二錢 一年分仝六十錢、郵稅なし。郵券代用は一割增の事。

▲廣告料 特別一頁七圓、普通一頁五圓。

發行所 東京市京橋區新港町一丁目十七番地 **由分社**

大賣捌所 上田屋 良明堂 東京堂 東海堂

明治三十六年九月廿九日印刷
明治三十六年十月二日發行

發行兼編輯人 東京府豐多摩郡淀橋町角筈七百三十八番地 堺利彥

印刷人 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 森潤二

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第七號

第六號はベラミーのルキング、バックワードの抄譯ばかりで紙面の殆ど全部を塞めたので第七號には其代りに多種多樣の趣味を讀者諸君に供し度と思ふて、平生本誌に同情を寄らる丶友人諸君に寄稿を賴んだ所、何れも快く承諾せられて、即ち目錄の示す通の諸篇を得ました。そこで編輯者はお陰を以て大きに樂をすると同時に諸君は秋の七草の咲亂れたるが如き眺めを得られた譯であります。

「偶感」は前號に豫告した題目に就いて編輯者の意見の大略を述べたものであります。他日又善き折あらば十分の説明をする心得であります。

家庭の道德

旭山生

封建時代に於ては、家庭は一小國若くば一城廓の如くに思はれて居つた。個人は其の家と云ふ一個體に隷屬し、家が單位となりて國家を組織したので、個人は直接に國家に結合したのではない。從つて法律も、道德も、家を中心として割出され、家父は直接に個人を支配し、個人の義務權利の殆んど一切は此家父に對するものであつた。

然るに、世の漸く進化するに從ひ、一方には個人の權利を認め、且つ之を擴張するの必要を生じ、他方に於ては國家の統治權を擴張するの必要起り、其中間に介在せる家てふ一團體は其存在の理由薄弱なるに至つた。我が國の親族法の如き、猶ほ家族制度を認め、甚だ保守的なりと稱せらる丶も、而も唯だ僅かに其形骸を留むるに過ぎぬ。

此の如くであつて、今は家庭を以て一の城廓と思ふ事は出來ぬ。否、思ふてはならぬ。家庭を城廓と思ふ時は、必ず之に私の念を生じセルフイッシュの考へを伴ひ、家庭の爲めには、内に對しても、外に對しても、總てのものを取て之が犠牲とする樣になる。實際、古へに於てはそうで在つた。そは歴史に明かである。乍併、今日に於ては斷じて此念を打破せねばならぬ。

余の考ふる所を以てすれば、家庭は個人間夫婦間の愛を基礎として成立したものて、之を宇宙又は社會の一分子たる個人の地位より見れば、家庭は人が宇宙若くは社會に對する義務を實行する一手段となるものである。既に家庭が個人間の愛を基礎として成立するものならば、古への如く其内に一の權力の存在する事を許さぬ。個人が相互の愛情に依りて、相互に犠牲となるは素より人道の本義に適ふものであるが、家の爲めに個人を絶對的に服從せしむるは背人道と言はねばならぬ。家庭の本義を沒却せしむると言はねばならぬ。

家庭を以て宇宙若くは社會に對する義務實行の手段とする方面より見る時は、其家の爲に家人を犠牲にするの不可なる事が更に明かである。例へば商人の子に商業嫌ひの者が出來た時はどうである。日本の習慣によれば、此場合に猶ほ強いて其商業を營ませ、其子は不得手な商業に嫌々ながら從事するのを以て孝行此上なき事と思ふて、其天稟の才を犠牲にするのが常であつた。是れ個人の社會上の本分を沒却し、家庭存立の理由を無視したるものて、斷じて斥けねばならぬ慣習てある。

又主人などが自己の愛情の爲めに家人を犠牲にする事があるが、是も人道の上より不可なるのみならず、天地の公道、社會上の公義に背反するものと言はねばならぬ。假令親として其子に對する場合にても猶ほそうである。幾何我子が可愛いからと言ふて、餘り愛に溺れて、却つて其子を怠惰、懦弱にしたり、或は奢侈、驕傲に陷いらしむる樣の事があつてはならぬ。是れは眞に其子の爲めに其子を愛するので無くて、却つて自

己私愛の爲めに其子を犠牲にするものである。此は唯だ一例に過ぎん。單に親の子に對するのみで無く、夫の妻に對し、妻の夫に對し、兄弟姉妹相對するも亦同じである。總て二個の人は宇宙の一分子として、又た社會の一員として、一の獨立した天職を持つて生れたものである。獨立した義務と人格とを持つて生れたものである。此の天職を完ふし、此の義務を實行し、此の人格を擴張するのが、則ち天地の公道、社會の公義である。親たるものも、夫たるものも、兄たるものも、決して之を無視してはならぬ。之を無視して個人を犠牲とするは其犠牲たる人に對して罪惡なるのみならず、實に天地の容れざる公道の上の罪惡と言はねばならぬ。

要するに、今日では、家は私の城廓では無くて、公けの樂園である。家人の總ては常に深き公心を懐いて、篤く公道を遵守し、以て公けの樂園たる家庭の眞意義を實現せしめねばならぬと思ふ。

結婚に就ての所感

田川　太吉郎

枯川詞兄足下、いつも忠實なる足下の態度を敬頌します、何か小生に書けよとの御注文は、當節柄聊か迷惑に思ひましたけれど、然し又此上なき本懐に存じました、取り立てゝ申上ぐべき時の問題を思ひ泛べませんから、結婚に就ての所感、特に小生の結婚の所感に就て、或一事を申上げます、

小生が結婚しましたは、足下の知らるゝ如く、實に去る二十八年の十二月二十八日で、今日から申せば七年と九ヶ月の以前です、爾來小生は既に一女一男を擧げ其一女は既に學校に通ふほどの齡に爲り、吾等當年の花婿花嫁を、早くも父よ母よと喚んで、人並相應の歡喜と慰樂とを覺へさせて居ます、夫婦の間は先づ以て仲善い方で有ります、双方ともに微弱で、病に侵され易くて、屢々お醫者様のお世話に爲ります度に、互にいたわり扶け合ふ情味が殖へまして、自然優しく爲り

行く樣に覺へます、それて小生は色々不滿の事あるに拘はらず、先づ吾等夫婦は、佳き夫婦と思つて居ます、特別に天の恩みを蒙つて居る夫婦の樣に思ひ、感謝して暮して居ります、

然しながら其間に特別に小生の記憶して、且感謝して居る日が僅か二日あります、それに就て申上げますが、それは結婚の當日と及び其翌日て有ります、小生は此當日及び翌日に、小生が如何なる人て有るかと、略ぼ細君に語りました、及び小生が何を細君に望むかをも略ぼ語りました、而して細君のそれに對する明白の領會と並びに確乎たる決心を求めました、而して細君はそれに對して一々答へる所が有りました、略ぼ小生の滿足する樣な答へを致して與れました、其答へにより小生は此人は可成り小生の望みを叶へる細君て有らうかと想ひました、それていよ〳〵此細君を愛することに爲りました。

顧みるたびに小生は此二日を神々しかつた日と思ひます、今まて相知らなかつた一人の男一人の女が、親の

許しを得て、互ひに手を握り、心を開いて行く末の事を語るのです、初めの夜は汽車の中、宿屋の二階、次の夜は、宿屋にて、宿屋の築庭、海の邊り、初めの夜には、月が有りませんてした、次の日は照り輝いたる日、其夜は月が有りました、語る互の心には、一點の邪氣が有りません、而して向上の勇氣、光明の理想が充ち滿ちて居ります、彼等は此からして其多年夢想して、未だ試むるを得なんだ理想の家庭を作らうと企つるので有ります、即ち相互の言葉に生命あり、互の顏付に赤誠あり、一言一語、總て神かけて、至誠を言ひ交はしたのは、勿論て有ります、それて、此場合に於て吾等夫婦は殆ど神の如くに爲りました、其前其後、小生は色々の機會に、色々の人に、心事を語つたことが有りますけれど、此二日ほど、愉快を覺へ、力を得、希望を起した日は曾て有りません、特に此二日ほど、高尚なる、純粹なる感じを覺へた日は有りません、此二日は確に小生に取り小生の生涯中、最も清き、最も佳き、最も氣高き日て有ります、

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どうか此樣な日に再び逢ひたいと思ふことが、屢々有りますけれども、叶ひません、其故は小生と細君の間に肉の關係が始まつたからだと思ひます、元來小生は肉の關係を汚れた關係のみとは思ひませんが、然しながら此關係は、極めて汚れ易き關係であります、小生などのも甚だ汚れて居ります、司馬溫公で有つたか、閨の中の言葉でも、人に聞かれて耻かしい言葉は無いと言はれましたが、それは司馬溫公の如き、千載稀有の人の事、小生などは、仲々それに及びも着きません、色々考へて時折は惋へ悲みますが、若し我國に、青年男女の交際する機會が有つて、且、自由結婚といふ、寬濶高明なる法式が有つて、夫たらんとし、妻たらんとする男女が、二年なり、三年なりの間、互に處女の神聖を以て、交り合ふことが出來たら、其間に、互の品性を高むるの利益は莫大だらうと思ひますし、且、既に二三年、互に純潔の行ひと思想とを持つて、交際しつけたる男女の間は、たとひ夫婦と爲りての後も、其間の高尙なる純潔なる心事思想の勢力を承け繼いで、隨分高尙純潔なる關係を持ち續けることが出來ようかと思ひます、少くともそれを持ち續けるのに、多少の便宜効力があらうかと思ひます、
因て小生は自由結婚論の賛成者で有ります、

田川君の「結婚に就いての所感」を讀んで予も亦甚だ多くの所感がある。富士見軒に於ける君の結婚式には予も招待せられて列席した。其夜君は新人を伴うて大磯に赴いた。
廿九年一月一日、予は君を大磯の禱龍館に訪うた。其時予の目に映りたる松原の間の朝日の光と清げなる君の新夫人の姿とは、今に至るまて鮮かに畫の如く見えて居る心地がする。予の結婚したのは其年の四月て、それより今日に至る七年の間、君等夫婦と予等夫婦との交際は、東京に、大森に、鎌倉に、續きては絶え、絶えては又續いて居る。回顧すれば實に樣々の情趣がある。只恥つらくば、予の家庭の放縱なる、君の家庭の清高なるに及ばざる事を。（枯川生記す）

（乞食）「奥さん、何か戴かせて下さいまし。
奥さんは茶碗に水を汲んで來て「マア水でも飲みな。
（乞食）「水が一杯ぎりとは餘りひどい。
（奥さん）「水なら何杯でもおあがり。

盆栽に就ての所感

無待庵主人

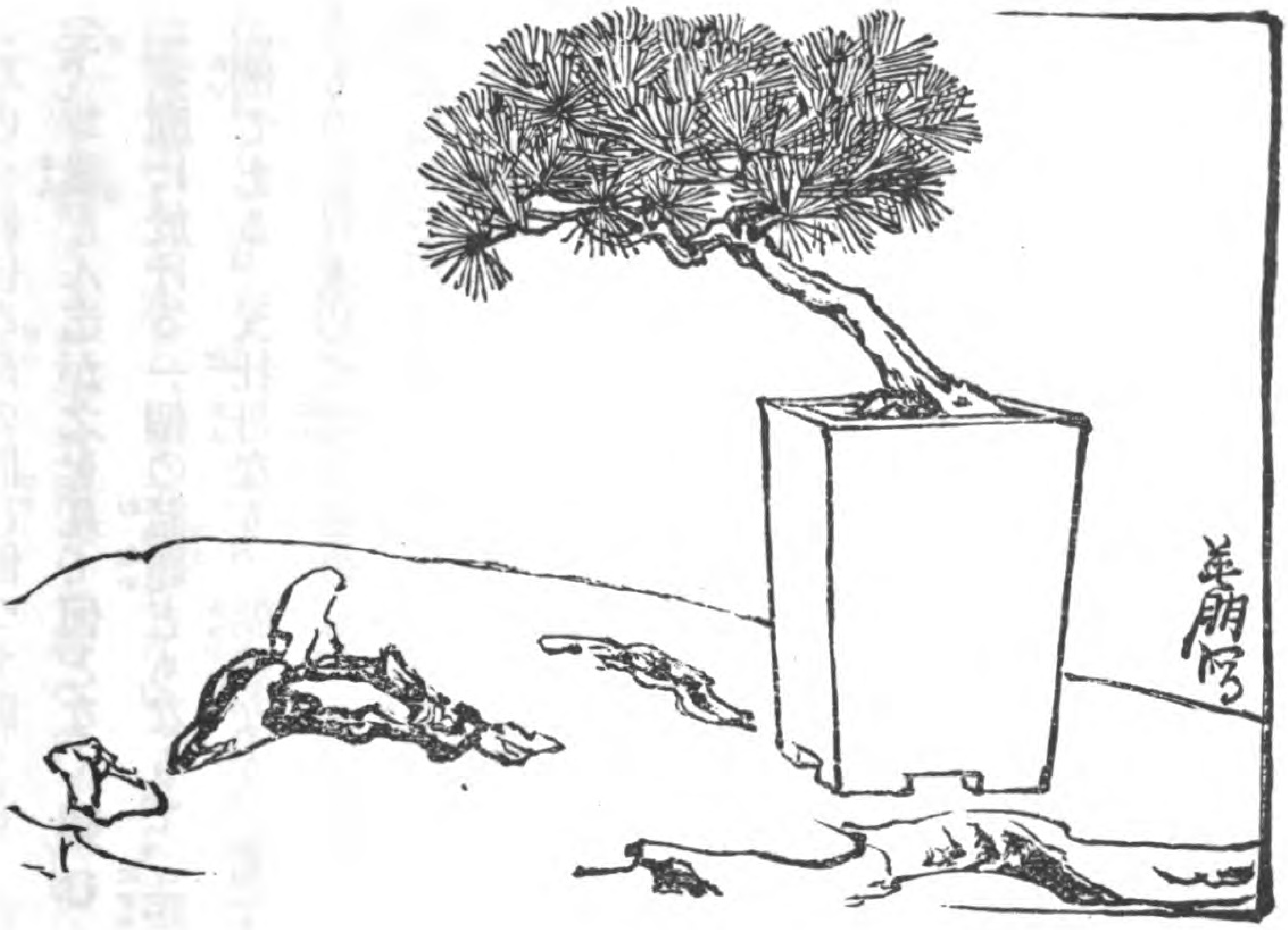
盆栽は自然の縮畫であると云ふ樣な大議論を擔つぎ出し、イヤスヂが何うである、斯うであると云ふ樣な小理屈迄も擔ぎ出して。嚴密に審査したならば、帝都名家の秘藏品中。及第し得べき盆栽は果して幾鉢あらうか。時々催さるゝ盆栽會に何百鉢の出陳があつたと云ふ樣な大數の割合には、極めて僅少であらうと思はる。夫にしても流行の勢は實に恐しきもので、一鉢何百圓、廉すきも何十圓と云ふのが目下の相場で、中には一鉢何千圓と云ふ驚くべき高價のものがある、そして同じ美術品でありながら、書畫骨董とは異なり、盆栽は元來活物であるから、極めて損傷し易く、又枯死し易きもので、若し枯死すれば何千圓の珍品も、一本の薪にだに如かざる結果を見るの危險あるにも拘らず、ドシ〳〵賣れ行くさうである。又大隈伯の如きは宏莊美麗の溫室を設けて一株何百圓と云ふ高價の奇草珍卉を貯へて居らるゝのは世人の熟知する所であるが、夫を岩崎、三井、川田、村井の富豪が眞似て、折角蒐集中なりとのことは誠に盛なりと云ふ可しだ。併し右の如き贅澤は彼等富豪の爲すべきことで、我等平民の眞似し得べき所で無い。縱し眞似ない迄も餘り此道樂が嵩じると家庭の平和を害し、業務を曠廢し、果ては家産を傾けたるの例は決して尠く無い。是れに就て一の話がある。今より十數年前、盆栽の流行が未だ今日の如く熾んならざる時の事で其頃盆栽五大通と呼ばれた内の某氏は、或時役所で月俸を貰つた歸り途、數奇のこととて何氣なく、足を馴染の植木屋に運んで、彼れか是れかと見廻はして居たが、其内にツイ自分の氣に入つた松を見附け出したから、サア堪らない、直に主人に向つて幾干かと聞くと二十五兩だと答へた。其頃は高いと云つても大抵十圓臺で、偶には五十圓位のもあつたけれど、夫れは極めて稀有の事であるから、二十五兩

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と云へば今日の五百圓以上に相當するの高價である。然るに某氏は其價の不廉に毫も驚くとなく、サア之をと云つて有り丈の金を出し、購ひ求めてニコ／＼我家に歸り、月俸を曝らけ出して買つた所より、其松を『吐月峯』と名けて、久しく鍾愛措かざりしと云ふ。其心事の洒々落々たるは誠に好個の風流人である。併し其時に於ける細君の思惑は如何であつたらう、或は爲に家庭の平和を害する樣の事は無かつたらうか。夫れは深く穿鑿するに及ばぬとした所で、今日我輩等の如き貧書生には、如何に盆栽が欲しいとて、數十百金を投ずる如き贅澤は出來ぬ。若し敢てしやうものならば、忽ち山の神より嚴重なる抗議を持込まれ、何歟に就て不平の聲を聞く樣になり、自分一人の樂も其半を殺減さるゝは請合である。夫ゆへ我輩は未だに一鉢をも貯へては居らぬ。唯だ見たい時は馴染の植木屋や、知人の家に就て、其藏品を賞觀するのを無上の樂みとしつゝあるが、是れならば毫も家庭の平和を害する氣遣ひ無く、極めて安全の方法である。併し妙なもので、我輩の如き家でも、假令へばお正月ならば松竹梅の寄植に、福壽草の一鉢位ゐ床の間に飾つて置くと、頑是なき子供や、お爨どん迄が之を見て何となく樂むやうで、夫が家庭に於ける一個の話題ともなりて、賑さを増すのが例である。又牡丹なり、朝顏なり、菊なり、其時々のものを買求めて眺むるのも、一同をして頗る趣味を感ぜしむるが、畢竟するに黃塵万丈の都會に住み、庭と云へは猫の額程の大さて、別に目を娯ましむるものがないからである。ソコで我輩等の如き平民の家庭に、季節ものゝ外、何歟一鉢でも、二鉢でもあると、大に家族一同の樂みとなり、多少の丹精を凝して夫を一年なり二年なり、持つて居ると段々愛惜の念を深からしめ、今年は去年より紅葉が一層麗はしいとて楓の話が出る、或は石榴の花が去年よりも餘計に着たとて、其開花を待ち兼ぬる樣のこともあり、趣味は次第に增して行くものである。是れが家庭に如何程和樂を與ふるか知れぬ。特に主人は時間て役所へ出勤する細君は下女を相手に家を守ると云ふ丈で、格別用事の

無い家庭などで、盆栽を世話するは閑潰しに好適の仕事である。そして夫れが家庭を賑はし、和樂を與ると は又一層であらうと思ふ。扨て夫なれば何んなものを置けば可いかと云ふに、素より其人の好不好と、身分に寄るとて、一概に之を極める譯には行ぬが、先づ松や、檜ならば常緑喬木であるから、一年中の眺めとなり、楓ならば其芽先の時より紅葉する迄は賞玩することが出來る。此他、梅、石榴の如き花物、或は草物抔の類を撰んで、凡そ一年中代る〳〵眺め得らるゝ樣に取揃へて置けば最も妙である。そして是等のものは緣日にて求むるを以て最輕便とし、植木屋では高々五圓位を最上限として買求むる樣にすれば、格別金を費さずに濟む。何うか其位の程度で此清き[illegible]を、我々平民の家庭に加ふることを流行させたいものである。

序に此處に挿みたるは毛利五郎男が秘藏の松であるが。何れ何十金とか云ふ大金を出されたものであらう。併し少しく品を撰んで、夫に丹精を加へたならば、我々平民にも是に似寄つたものを持つことは差して六ヶ敷いことは無い。



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女皇陛下万歳

（ロヤスチン、マッカーシーの原著より）

余は頃者内外出版協會から囑まれて『少女立志編』を草した。次の一篇は『少女立志編』を草するに方つて、極めて興趣ふかい文字であると感じたから、試みに譯して家庭雜誌の主幹堺枯川氏へ贈ることにした。九月二十三日　加藤眠柳

千八百三十七年六月二十日の午前二時半に垂んとするとき、ウヰリヤム四世はウヰンゾルの宮殿に於て崩御せられた。そのとき使者等は王位の繼承者たるヴヰクトリヤ女皇を迎へまつらんとて、とりもあへず既にケンシントンの宮殿に急ぐのであつた。

崩御せられたウヰリヤム四世は、ジョージ三世の第三の皇子であるが、王位を繼承すべき一人の御子をだに有たせられなかつたので、王位はジョージ三世の第四の皇子即ち陛下の弟君に渡らせらるゝケント公の姫君に歸すことゝなつた。その姫君は即ちアレキサンドリナ、ヴヰクトリヤ公主である。

公主は千八百十九年の五月二十四日、ケンシントンの宮殿に御誕生あらせたまふたのであるから、このとき御齢わづかに十八歳にならせたまふのであつた。ケント公は公主が御誕生あらせたまふてより數月にして薨去したまふたから、公主は未亡人なる母君の監督の下に置かるゝことゝなつた。さるほどに公主は母君の並びなき良き教育によりて、智德の衆に秀れさせたまへるさへあるを、活潑にして自助の精神に富ませられ、よろづに秩序ある御方とならせたまふた。のみならず宛も貧しき際に生たちたまへりしやうに、小心と節儉の何ものなるかをも敎へられたまふたのである。

およそ歴史家が親王内親王の敎養に就て語るところのものは、一般世人に於て甚だ信を措かぬに極まつてゐるが、ヴヰクトリヤ公主が聰明良善の薫育を受けさせたまふたの而已は疑ふとが能きぬ。

少き公主が王位を繼ぐべき報に接したまへる當時の狀況に就きては、ウイン孃のものせる彼の美しい描寫の文字がある。これは既に屢々引抄されてはあるが、こゝに又其一節を記すことにする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

カンタベリーの大僧正ホーレー博士と、侍從長コニーングハム侯は、王の崩御を報ずるためウヰンゾルの宮殿を出て、ヴヰクトリヤ公主の住みたまへるケンシントン宮殿へ伺候した。兩人がウヰンゾル宮殿を出發したのは夜中の二時で、そのケンシントンへ到着したのは朝の五時であつた。兩人は門を敲いた。呼鈴を鳴らした。宮殿の守衛を呼び起すのに多くの時を費すのであつた。やがて門は啓かれた。斯くて兩人は又中庭で待たされること多時、漸く階下の一室に導かれるのであつたが、いつまで待つてゐても取次いでくれる者がない。全く取次の人々から忘れられてゐるやうにあつた。兩人は乃ち又呼鈴を鳴らして、臣等は大切なる用事を帶びて參上したのであるから、ヴヰクトリヤ公主殿下に拜謁を望む旨を取次いで給はれと願つた。宮女は頷いて去つたが其去るや又ひさしく報を得なかつた。依て兩人は更に又呼鈴を鳴らして、殿下の御都合の程を伺つた處宮女は始めて兩人に對つて、公主は今御心地よげに

睡らせたまへれば、起し奉るのは恐多い旨を告げた。兩人は是に於て宮女に對ひ、臣等は國家の事の爲に女皇に拜謁せんとて伺候したのである。よしや御安眠中なればとて敢て驚かし參らせざるを得ぬと告げた。女皇は國家の事の爲てふ兩人の語を聞かせられけん、待つこと數分にして兩人の控へたる室に臨御せられた、寛かる白き御寐衣に同じショールを召させられ、御寐帽は無くして御髮は左右の御肩に垂かゝれるが、御足にはスリッパを穿たせられ、御眼の中に涙を湛へさせたまふた。然し毫も取亂させたまへる御風情なく、端然として兩人に御對面あらせられたが、やがて使を遣して總理大臣メルボーン卿を召し、午前十一時といふに樞密會議を開かせられた。斯くて尙書は先例に從ひ伏して女皇の宣誓を請ひ、終つて女皇は出席せる內閣の各大臣および樞密院議員等から忠順の宣誓を受けさせられた

グレビル氏は平素彼のハンボルトやバアーンハーケン、ボン、エンセ等の如く、皇室若しくは皇族等に對

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、熱心なる讃美を與へるのを好まぬ人であるが、氏が新女皇の即位に就て記したるところのものは、こゝに引用して讀者に示す價値があると思ふ。

王は昨曉二時二十分に崩御せられた。少き女皇は同じ日の午前十一時を以て、ケンシントン宮殿に會議を開かせられた。當日新女皇が始めて列席の群臣に與へたる感動、並に新女皇の儀容態度に就き、人々の心より底より讃美歎賞せるが如きは、固より當然ではあるけれど前古曾てないことであつた。さるは新女皇の御ものごし御ふるまひが尋常と異つて高尙く、加之遠く人々の意表の上に出たからであつた。女皇の御齡の著るしく御少くて在らせらるゝと又世なれて在さぬと、および世界が女皇の御爲人に就きて全然何をも知らざりしとは、をのづから人々をして好奇の念を起させたので、女皇が是試みの時機に於て如何に擧動ひ給ふかを視んと欲し、人々は取るものも取あへず皆召集に應じた。まづ第一には女皇に即位の故典を敎へ奉るのであつた。首相メルボーンは是れを爲すために自ら稽古せざるを得なかつた。女皇は列座の諸卿に御會釋を遊ばして玉座に即かせられ、つゆも怯げ憶したまへる御氣色なく、玲瓏、明晰、何人にも聽とれるやうな朗かな御調子を以て勅語を讀上げたまふた。女皇は極めて質素に裝ひたまひ、御喪服を着けさせたまひしが、勅語の濟みたる後スコットランド敎會保護宣誓の御事があつて、次に樞密顧問官等が宣誓した。まづ是宣誓を行つたのは二人の公爵皇族であつた。この兩老は女皇の叔父であるが、女皇の足下に平伏して忠順を誓ひ、恭しく玉手に接吻した。女皇は是時政治の上と緣類の上の關係の斯くも異れるに感じたまへる者の如く、その御頰を眞紅に染めたまふのであつた。但し女皇が感動したまへるやうに見られたのは是一事のみであつた。女皇が老いたる兩人の叔父君に接したまふや頗る御嫻雅に又御親密に見奉られた。さて兩人に接吻の禮を返したまふて後、女皇は玉座を起つてサッセックス公爵の方に玉步を運ばせたまふ

た。けだし公爵の席が遠いのと、老衰して體が自由に利かぬことを知ろしめしたからである。さるほどに女皇は宣誓する者の多いのと、一人々々代つて玉手に接吻する者の多いのに、やゝ驚いて在すやうであつたが、何人に對つても一言も發したまはぬのみならず、位階、地位、黨派の差が何であらうとも、つゆも玉顔を變へたまふやうなことがなかつた。メルボーンを始め内閣の各大臣、ウエルリントン公、ピール等が御前に近づいたときは、特に余は御氣色を注視してゐたけれど、別に何等の御變りも見えさせられなかつた。女皇は是儀式の間いかにすべきか疑はしきことあれば、メルボーンに對つて御尋ね遊ばすのであつたが、そのやうなことは幾んど希で、極めて沈着いて御靜に御嫺雅に又御謙遜に儀式を畢らせられた。

士爵ロバート、ピールは右のグレビル氏に對つて、女皇御自身が其御地位に就きて明かに深く自覺したまへると、自若として毫も惡びれたまへる御樣子なきと、

その儀容態度の高尚く見えさせられたのに驚いたと語り、又ウエルリントン公も例の質直なる調子で、よしや女皇が自分の女であつたにしても、余は斯した場合に女皇以上に擧動はせることは能きぬと告げた。

グレビル氏さらに記すらく

女皇は十二時に御前會議を開かせ給ふたが、さながら多年御經驗あらせられたやうに、難なく會議を統べさせたまふた。殊にランスダオン卿と余の同役は、議案に多少の混雜を來さしめるのであつたが、女皇の御氣色は毫も變らせられなかつた。女皇は何れかといふと小軀に渡らせられ、將その御容顏は美麗といふほどではないが、その御ものごしの嫺雅なると御顏の柔しく平和なると、要するに其快豁なる御姿は、近づき奉る者に無量の感化を與へたまふのである。余も亦その感化を蒙むつたる一人である。

蟲のはなし

鼠骨

秋も早や最中を過ぎた。昨今のうそ寒い夜長には何となう心淋しい氣持がするのに、庭では千草にすだく蟲の音がいよ〳〵あはれを添ふるやうになつた。其處で一ッ此蟲のお話をさせてもらう事にしよう。と言つた所で僕は固より昆蟲學者でない、唯だ甞て自分の見聞した事を極く略に御吹聴するばかりぢや。

△蟲の種類

若し皆なさんが夕方から田圃なぞへ散歩に出かけられると、此頃の事だからお月様は御機嫌のいゝ貌で吾々を照らしてゐられる。草や稲の香をふくんだ風はセルの單衣の袖に吹きたまる。高黍の穗は風にくすぐられて、から〳〵と笑つてゐる。芋の葉は飽迄もイヤ〳〵の眞似をして遊んでゐる。其處へ或ひは遠くから或ひは近くに、幾百千かの蟲が各々聲を張りあげて此の氣持のいゝ秋の夜を讃美してゐるのを聞かれるてあらう。さうして此の蟲の音は各々異なつた調子、變つた音聲を出してゐるのを聞分けられるてあらう。諸君の耳には幾つ聞き分けられるか知らないが、普通の人の注意によつて聞分け得られる者が三十六種、昆蟲學者の鋭い耳では實に五十三種ばかりもあるさうです、驚いた種類ではありませぬか。此の五十三種若くは三十五種は何れも違つた種類で其性質や鳴聲や體形を異にしてゐるのではあるが、動物學上から分類すると、こほろぎ科、きり〳〵す科、バッタ科(蝗科)の三種類に纒められ、此の三種類は更らに直翅科といふ一科目に纒められるのです。言換ゆると、秋の草むらにすだく虫は、何れも直翅科に屬する虫であつて、こほろぎ科、きり〳〵す科、蝗科の三種類に分かれ、それが更らに三十五種ばかりに區別されるのです。普通世間で鳴くとして知られて居るのは、松蟲。鈴蟲。こほろぎ。がちや〳〵蟲。馬追。きり〳〵す。くらゐの六七種ばかりですが、試みに右の三十六種は何々であるかといふに、こほろぎ科に屬するものには蟋蟀、三ツ角

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

こほろぎ、おかめこほろぎ、閻魔こほろぎ、熊こほろぎ、松蟲、鈴蟲、熊鈴蟲、草ヒバリ、ヤマトスヾ、斑鈴、姫クサスヾ、伊吹スヾ、鉦たゝき、の十五種類。それからきりぎりす科には、きり〱す、伊吹きり〱す、鬚長きり〱す、鋏切、馬追蟲、轡蟲、露蟲、管巻ダマシ、草切、笹切、緑さゝきり、羽長さゝきり、鬚長さゝきり、薄色さゝきり、姫さゝきり、といふ是れも十五種類。次ぎに蝗科で鳴くと言つてよいのが、鳴蝗、ヒナバツタ、キチ〱バツタ、それに黒イナゴ、殿様バツタ、の五種類である。是等が皆んな鳴聲を異にしてゐるんだから面白いではありませんか。是等の蟲の鳴聲と常性とそれから形狀をお話しすると倘ほ〱面白いのだが長くなるから又としよう。

△蟲の五體

是等の蟲がドンナ形ちをしてゐるかは皆さんの既に御承知の事であるから詳しい說明はいらぬ。併し大體の構造だけを言つて見ると、今一匹の蟲を捕へて來て詳かく眺めてゐると、頭がある、其下に胸部ともいふ可

き硬き皮を被つた部分がある、それから其のあとには柔かな大きな腹部があつて、上下二對都合四枚の羽は殆んど此の腹部の全體を掩うてゐる。目は頭の先きにあつて三角の形ちをして顏とも見るべき所の下の方には口をあいてゐる。目の下の處には二本の比較的に長い角のやうな鬚がある。胸部から腹へかけては六本の足が出てゐる。尻の處には蟲によると一本の身の丈けばかりの劍を持つてゐるのがある。肉眼で見得る蟲の五體は先づ是だけである。斯く見て來ると頭も胸も腹もあつて、目口手足もあつて殆んど人間と同じ程の機關を持つてゐるが、唯だ人間にあつて無いのは鼻と耳とである。所が鼻こそ無いけれど、耳はチャーンと備はつてゐるから面白い、其の耳に就ては後ちにお話しするとしよう。

△色と鬚

此種の蟲の色はいろ〱様々て、青いのがあれば茶色がゝつた褐色のもある、黒がゝつた褐色のもあつて一定してゐない。等しく轡蟲でありながら、全く青いの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もあれば飴色のもあるといふ風に、同一種のものであつても一定されてゐない、これは一寸考へると雌雄の差であるやうにも思はれるが、決してさうでないから面白い。彼等の色は悉く其の居る處の草木や又たは土色又たは木の葉など、一致するので、青い草むらに居のるは青い色をしてゐる、山の落葉などの中にゐるのは赤褐色になる、赤土の上を飛びまわるのは皆な赤土色になる、夜ばかり出て來るのは夜の暗い色に一致してゐるといふ風に、其の居る所の色と共に身體の色を異にする。是れは全く彼等が他の蟲又は鳥などの害敵に見つからないやうに造物主が彼等に與へた色であつて、言はゞ猫の爪、犬の牙、牛の角など、同しく彼等の武器ともいふ可きものである。又た彼等の頭にある觸鬚、長い鬚はどうかといふに、是れは觸覺を司るので盲人の杖と同じく此の鬚に觸つて見て始めて或ひは進んだり退いたりするのだ。所が此の觸鬚には長いのと短いのがあつて或者は自分の體軀の三倍も五倍もの長さを持つてゐるのがある。是れも矢張り害敵をさける爲めで、完全な羽や足を持つてゐる蟲は羽又は足てドン〳〵逃げる事が出來るから鬚は短いし、羽や脚の發達の不充分のものには長いのがついて居つて、早やく害敵の襲來を知るやうに出來てゐるのです。

△どうして鳴くか

こほろぎ科の蟲は下の一對の羽が非常に透明に出來て居つて、而かも非常に薄くて彈力性を持つてゐる。其の下の一對を上の方に斜に立てゝ左右を劇しく摩りあはせるので音を出すのである。言はゞガラスとガラスのとの擦れあつて音を出すのと同じである。きり〳〵す科の虫は前のと同じく左右の羽の摩擦で音を出すのであるが、唯だ違つてゐるのは摩擦する上に尙ほ羽に窪んだ皷膜のやうなものがあつて、互ひにすれあつて音の出るのと共に其の皷膜に反響する、丁度胡弓の糸と馬の尾がすれあつて音を出すが更らに下の皮を張つた胴に反響して善い音を出すのと同じです。蝗科の虫になると全く趣を異にして、下羽と長い後脚の股とを摩擦して音を出すのです。

△何の爲めに鳴くのか

人間は悲しい時には泣き、うれしい時にはよろこんで謡ふ。虫の鳴くのはうれしいのか、悲しいのか、寒いからであるか、夜露が厭で鳴くのか。何れの動物でも雄は雌を呼ぶ道具を持つてゐる、鷄の雄の美しい冠や勇ましい聲は雌を呼ぶ爲めてある、鹿の牡のいかめしい角と美しい聲も牝を呼ぶ爲めてあると同じに、天帝は此等の虫の雄に美しい聲を與へて雌を呼ふに差支のないやうにしてやつたのてある。從つて鳴くのは悉く雄虫であつて、雌虫は決して鳴かないのである。

△耳は何處にある

雌を呼ぶ爲めに雄が鳴くとすると、その雄の美しい聲に聞きほれて慕つてゆく雌には耳がついて居らねばならぬ。其耳は何處にあるか、こほろぎ科ときり〲す科との虫には前肢の脛の所についてゐるし、蝗科の虫は第一の腹の環節に備はつてゐる。人間は首を傾けて聞くといふが、是等の虫は前肢を投出して聞くとか横腹を突出して聞くとでも言ふてあらう。

* * * * * *

夕月夜こゝろもしのに白露のおくこの庭にきり〲す鳴くも。
草ふかみきり〲すいたく鳴く宿に萩見に君はいつかきません。
秋の野に道もまとひぬ松虫の聲する方に宿やからまし。

●家内の送り迎へに就いて

△「私なども宿車に乘つて家に歸ると、門の外から車夫が『お歸り』と呼び立てる。けれども私の家では妻も下婢も一向玄關には出て來ない。車夫も此頃は其事を知つて仕舞つて、これをやらぬやうになりました」（安部磯雄君演說の一節、「家庭の友」第七號より借用）

△「家の主人が出入するとき家内の者が玄關まで送迎して御辭儀をすると云ふやうな事が能く世間にあるが、私の處では絕えてソンな事がない私の外出するには玄關からも出れば臺所からも出る、歸る時も其通りで唯足の向いた方に這入て來る、或は車に乘つて歸つて來た時に車夫又は別當共へ玄關の處でお歸りなんて餘計な事を云つて呉れるなと云ふ譯であるから、幾ら玄關で怒鳴つても出て來る人は無い、其一點になると世間の人じやない近くは內の御祖母さんが怪しんで居りませう、此老人は土岐家の後室本年七十七歲むかしは奧平藩士の奧樣て、武家の禮儀作法を大事に勤めた身であるから、今日の福澤の家風を見て何分不作法で善くない、左ればとて是れが惡いと云ふ箇條も無い、妙な事だと思つて居るだらうと私は竊に推察します（福澤諭吉翁自傳の一節）

△「夫出てゆけば妻之を送る。それは必ずしも夫を尊敬するからでは無い。暫くなりとも共に在りたきの情からである。夫歸れば妻之を迎ふ。それも同じく只一刻も早く相見たきの情からである。今の世俗には只尊敬の意味ばかりの送り迎へも多いであらうが、それは昔の殿樣流の儀式の名殘、新風味の家庭に於いては情の送り迎へが自然である。」（家庭の新風味第四册二九八頁）

●冷水浴に就いて

△「殊に今は冷水摩擦を實行するに最も適當な季節で今日の季節から實行しないと冬に入つてからナカ〳〵やれるものでない、又やりだしたら毎朝必ず缺かさずに勉めて實行するよう、氣分の悪い時押して無理にやるのは却つて身躰に障るから之は止める樣になさい、そして氣分が恢復したら又怠らずやるようにすると、冷水摩擦の特効は自然に現はれ、外の病に冒されるやうな事も少く、外害に對する抵抗力も大いに増して精神爽快を覺えます」(婦人衛生雜誌一六六號、瀬川醫學博士の談話)

△「日本の家庭として中流以下の家には浴室の在るもの至つて稀なるゆえ冬の寒い時など冷水摩擦をやる場合には第一場所に差支へるけれど、場所の無い位で實行を怠るやうな薄弱な精神では迚も冷水摩擦をやり遂げる事は出來ません、先づ浴室の無い家では、臺所でも、板間でも、成るべく閉切つて冷たい空氣の吹きとほさぬやうにしてやるが宜からう、慣れた以上は椽へ出てやつても風の吹き通す所でも宜いが」(仝上)

△「十月頃冷氣になつた頃は少々堪へ兼ぬる事もありましたが、こゝぞ忍耐の時期と心を取直し竟に極寒も押通しました其時私の住居せし地は井が誠に深くして水を汲むに不便なりしかば、市中に流れる小川の水を汲みて浴しました、其冷たさ手を入れる事も威りかれる程の水でしたが、丸裸になりて一杯肩より掛ければ恰も湯より上りたる時の如く身躰より湯氣が立ちます、然る上は何杯あびても少しも冷たい事はありません、誠に精神が爽快になり、寒氣を防ぐに妙であります」(冷水養生法、利根川孫六君報告の一節)

花と家庭

(植物栽培の趣味)

久田二葉

▲人の娯樂に種々あるが、草花栽培は其の中での純にして潔なるもの、人の心の塵垢を去ッて、浄快を覺えさせ、神を養ふ上、自ら氣が暢び々々して、身の健全を致すのである。殊に此の草花を培養し、植物の研究に資する如きは、實に神の業である。テニソンの歌ふを聞かずや、

壁の裂け目に咲く花よ
汝をここより取り出だし、
根もろともに手には持つ。
汝は小さき花なれど
その生立を究むれば
神と人とを知りぬべし。

▲家庭には大抵小供が生れる、此の神の子と花弁とを一しよに生長させるのは尚一段の樂しいことである。

▲何故に花はかく美しく、苺はまたあのやうに甘味からうか、ヘンリー、ドラモンドの『人類の上進』を讀め植物が花を開き實を結ぶと云ふことは、其の最大の犧牲であッて、人に例ふれば丁度母親が其の子の爲めに致す愛のそれに異ならぬのである。母親の其の子に對する熱愛溢れて行爲に現はるる其の間の美しさ。如何に世は腐敗し醜惡公行するも、此の母の愛の存する間は決して失望する必要はない、實に其の愛の輝きは世の暗黑を照す光明である。花も又其の通りで、植物が神の法則に從ひ生長發達し、其の定められた時が來れば自己の凋衰を厭はずして、玆に子孫の爲め種族永續のために大なる犧牲的行爲即ち開花結實をなすのである。而して母親の子の爲めに何事もなかれよがしと勉むるやうに、植物も種々の粧ひをし、香を散じ蜜を分泌し或は花瓣を開閉して、子孫の健全ならんことを求め、苺の如きは紅ひの上に紅ひを濃くし、熟して人と鳥とを招き、而して其の子孫の蕃殖を計らうとするのである。それで自然がこれを飾るに絶好の美を以て

小供が家庭にて笑み自然界へ出て笑ふのは花の蕾かとも疑はれ、花が一處に居を占めて、奇形と珍色との利器を以て自然界で笑みつゝ生長し、笑ひつゝ種子を殘して代を終るのは、小供のおとなしくのび／＼と生長してやがて運命と闘ひつゝ代と職分を果てるのに酷似して居るのである。で、吾輩は自然界の中に家庭はあるべきもの、家庭には小供と花はあるべきもの、そうして小供と花とは自然の生むものと斷ずるのである。

ローウアルの歌ふを聞かずや、

賤しき此の身を捨てずして、
自然がなせるいつくしみ、
あらゆる不思議はめぐり來て、
年中見ぬ日はなかりけり。
風の吹くのも露したたるも、
雨の降るのと日の出入、
地球の日々に廻るのも、
これや賤しき此の身をば、
天晴スミレとなさん爲め。

する事と思はれる。

▲愛他的生活の高尚にして美なること、これ花に就いて我等の學ぶべき所である。それで日夕花に接して冥々の中に此教訓を受くることが出來るならば、吾等は實に幸ひなものと云はねばならぬ。トルストイをして放蕩無頼の生活より聖善の生涯に立返らしめた『自然の美』は亦吾等を卑しき利己的生活より愛他犧牲の生涯に移らしむることは慥かである。而して吾等が最も近く接し得る自然の美は即ち花の美である。

▲土井晩翠氏の『星と花』にも、

同じ自然のおん母の、
御手に育ちし姉と妹、
み空の花を星と云ひ、
わが世の星を花と云ふ。

とある、實に花は地上の星である。ソロモンの榮華も花の前に立ッては、どれ丈けの權威があッたらうか。藤原廣嗣が花より大教訓を得て『この花の一とよの中に百種の、言ぞこもれるおろそかにすな』と詠み、平忠度が花に感謝して『行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花やこよひの主ならまし』と歌ひ、平野國臣が『君が世の安けかりせばかねてより、身は花守となりてんものを』とかこちたるを見ても、昔より我が國に花の歸依者の少なからぬを喜ばねばならぬ。

▲花は又、詩人に歌はれて有聲の畫となり、畫家に畫かれて無聲の詩となる。古來幾多の詩と畫とは、天然の美の爲めに挑發せられ、自然の妙によりて謳歌せらるるのである。而して其の天然や自然を、綾り飾るのは花である。誰れしが花に對して不快に感じやうか、我が身世にふると述懷した小町の花も、村夫野孃の眺むる花も同じで、只だ其の感を云ふと云はぬにあるのみだ。我が輩は斷言する、母親が笑む乳呑子を懷いて、笑ふ花に對して居る時は、實に名畫であると。

▲オオ！天は吾人に草木を下し、花弁を與へて、衣食住以外、別に無限の娯樂を恣まゝにさせるのである。

▼次　には『植物栽培の利益』『草花栽培の要素』を書く▲

秋まく草花

▲虞美人草▲日々草▲矢車草▲麝香撫▲金鶏菊▲佛麥▲牡丹げし▲糸なでしこ▲水仙翁▲ヒラシン▲紅草▲美女ざくら等は是非秋の中に種子を蒔くがよい。他は春蒔いても立派に育つて花が吹く。また余は追々栽培について語るつもりだから、讀者諸士、心あらばこれからそろ〳〵種子を下してみられよ。猫の額ほどの地面でも、鍬てつゝいて蒔いてさい置けば、小童と同じくのこ〳〵生長して行きます。骨董物か何かを扱ふやうに難かしがるには及ばぬ。

倫敦雜話（二）

停　愛　氏

▲かつぎ屋

文明の中心と誇つて居る倫敦人に頗るかつぎ屋の多いのは實に可笑しな話て、就中、女に最も多い、それも下等社會ならばまだしもだが、堂々たる貴婦人連にかつぎ屋尠なしとせずと云ふに至ては驚かざるを得ない。今や彼等は隨分高等の教育も受け、社會には相當の地位を占めて居るにもかゝはらず愚にもつかぬ事を氣にするのは三四代前の祖母さんの思想其儘だ。

嘗て、或家の晩餐に招かれた事がある。自分の行ッた時、既に先客が拾一人揃ふて居た。處が其時主婦の弟が不意に旅先から歸ッて來て一所に晩餐の席に連なる樣になッたので總客數拾三人となッた。此拾三と云ふ數は例のかつぎ屋の最も忌む所てあるから、主婦は穩かならぬ容子で顏色も少し變ッて居ッたが、ちようど子供の乳母が二才になる兒を連れて其室にはいッて來た。其子はたッた今寐床から起された計りと云ふ樣子て、まだ目を閉ぢて欠伸をして居ッた。そこで兎に角拾四人目のお客が出來たので、他の貴女紳士も席につく事が出來て、自分もようやく食事にあり付いた。其子は大人並の椅子の上に置かれて、やはり食卓について食事のすむ迄殘ッておッた。

大概の婦人は滿月の後、月が次第に欠けて行く時分には、決して髮の毛を切らない。又もし過ッて鏡を毀す樣な事があッたら、殆んど病氣を起すほど神經を惱ます。自分の知人に四十四五になる婦人があるが、二三ケ月前、少さな手鏡をこはした。それから後は、其婦人はしじゆう災難除けのまじない見た樣な事をして居る。もし一人で外に出ねばならぬ事がある時には、首のまはりに紐をまきつけ、それに名刺をつけて、何時死んでも何の誰と分る樣にして居り、家内に何か事があれば皆鏡のこはれたセイにしてしまう。子供が風を引く之も鏡のセイだ、下女が出奔する之もソウだと云ふ風に何んでも斯でも鏡にもつて來る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

自分の知ッて居る婦人に、初めはいッた戸口からでなければドウしても出ないて、二三里位廻り道をしても外の出口から出て行くのを嫌ふ人が居る。子供がちよいと梯子の下を通ッたので、其子に何か災難がありはしまいかと瘦せる程氣遣ふて、二週間も學校を休まして其子を内に引とめて置いたおつかさんも知ッて居る。

其他、梯子段て人に出遇ふた時は一人は跡戻りをするとか、肉叉が手から落れば何だとか、一々書きたてれば限りがない。早い話しが占ひ者の多いのを見てもわかる。ヂプシーと云ふて日本の野非人を見た樣な漂泊人種が居るが、之れの主な職業は椅子つくろひ、掃子作り抔だけれども、內職は占ひだ。甚しきはイーストエンド即ち東京て云へば京橋の樣な目貫の處に堂々たる家をかまへて密かに貴婦人連を相手にして居る占ひ者もあるそうだ。

△守錢奴

西洋には種々の事に兩極端が多い。惡人は大惡て善人は思ひ切ッて善い。家がなくて公園の草の上に餓へて眠ッて居るものがあれば、幾億萬圓の富を一人て持ッて居るものもある。奇人は飽く迄奇で偏屈人は想像の及ばぬ程偏屈なのが居る。之等の有樣は追々に報ずる事として茲には極端な守錢奴の話をしよう。

二三週前の事だが、或慈善病院に哀れな衣服を着た年老いた乞食がやッて來て、私は此世の中に知ッて居る人は一人もなく、錢も一文も持ちませぬからドウにも仕樣がないとて入院を願ひ出た。そこで掛員は其願を許して世話をしてやッて居る內に、二三日の後に其老人は死んでしもうたので、其死骸を檢査するとハンケチにくるんだものが出て來た。能く見ると二拾萬圓計りの公債株劵がしまッてあッたと云ふ話しだ。

ライムリックと云ふ救貧院に二拾年間も養はれて居た男が先達て死んだ。此男は實に吝嗇なやつて、其仲間と話しもせず、醫師にも宣教師にも遇ふのを嫌ふて居ッた。誰れも此男が院からあてがはれて居る金の外に一物も持ッて居ようとは思ッて居なかッたが、其死後

衣服の間から四萬圓計りの紙幣が出て來たので院長も大に驚いたそうだ。

二ケ月前、兼て守銭奴と云ふ評判のあるウキリアムと云ふ男が、赤貧者と云ふので救貧院に入れられたが、間もなくそこで死んだ。そこで其兼て住んで居た貧乏長屋を掃除した處が、家の隅から紙幣金貨取交ぜ二萬圓出て來た。此男は生前、外に出るにもボロを着て、跣足で歩いて居たそうだ。常に食ふ物もロクに食はず、饑へて居たから體が弱ッてしまッたので、救貧院に入ッてから不足なく世話をされたけれども、死んだのは此衰弱が原因だッた。

昨年十月、グリニチ救貧院で死んだ乞食は遺産として二萬圓程のものを殘して居ッたそうだ。バースの慈善院で一人の男の死後、其机をこぢあけて見ると一萬圓の金が出て來た事がある。ランベス救貧院に入院して居た中年の男は、其かくしに一萬圓の銀行預金帳を持ッて居たそうだ。

數週間前、ロンドンの西區シエパードブッシユと云ふ所に一間を借りて住んで居た一人の男がある。常にリユーマチに惱んで追々半身不隨になッて來たが、どうしても醫師に見てもらはないで旣に重症に陥るので家主が見兼ねて區醫を連れて來た。其區醫が慈善院に入院さしてやッて、此男はそこで死んだ。家主は常々其男の赤貧を憐んで食物を施して居たと云ふ話しだが、死後其室を探すと、郵便貯金、整理公債、鐵道馬車株など合計一万圓のものが出て來たそうだ。が、一人の親戚もなしと云ふので其財產は悉く政府に沒收された。

偶感

△長子相續法

枯川生

今の日本の法律及び習慣では、長子は第一に家督を相續する特權を有して居ります。家督とは抑々何の事でありましようか。民法を見まするに、戶主權及び財產權を指したものらしく思はれます。然らば先づ戶主權とは何でありましようか。

戶主權とは、昔てこそ重大なものでありましたらうが、今ではホンの名義ばかり、別に是れと云ふ程の權利でも權力でもありません。只漠然と「一家の首長となりて其家を管理する」と云ふ位なものであります。

然らば第二の財產權とは何でありましようか。

財產權とは、民法を見まするに、「系譜、祭具、墳墓の所有權」と「其餘の財產權」との二つに分れて居ります。先づ系譜、祭具、墳墓の所有權、是れは實に有りがたき權利であります。一例の爲に私の一身一家に就いて考へまするに、私の家の系譜は半紙五枚ばかりを無雜作に綴ぢた一卷でありました。私は父の死後に父の手箱の中からそれを發見しました。開いて見まするに、私の祖先何代かの姓名、祿高、職務等が書いてありました。私の祖先は代々豐前小倉の城主小笠原侯に仕へて十五石四人扶持を賜はり、お鷹匠か何かを勤めて居たと云ふ事の外に、何も知り得る事はありませんでした。それだけの事ならば系譜を見ぬ前から知つて居たのでありますから、畢竟系譜は私の爲に何の利益もなき者でありました。只いさゝか考古の材料として趣味がありますので、私は其最近の一枚（即ち父の代の所）を裂いて、屛風の張交に用ゐました。是れが御大家の事であるならば、系圖師の手に掛けてシンコ細工の樣に拵へあげた、立派な系譜の一卷が傳はつて居る事でありましようし、それを開いて見る時には、我家が桓武天皇九代の後胤から出て居る事が知れたり何かして、嘸かし名譽の事でもありましようが、我々の微々たる家におきましては、只他の諸名家と共に神

武天皇御一族の末であると信ずるか、但しは總べての人類と共に猿の後裔であると信ずるかの外はありません。いづれにしても私などは其れで十分滿足に感ずるのであります。又多くの名家においては、其系譜に依つて祖先の人物や事業を追懷するの便もある事でありましようが、我々の家においては幾ら系譜を開いて見ても、其樣な光榮ある歴史がありません。只、近い所ならば、殘つた手紙に依つて祖母の能書を知り、傳はつた逸話に依つて祖父の寛大を知ると云ふ位で、そこらに隨分深い感化は受けますが、それは少しも系譜に關係せぬ事であります。又遠い所ならば、我々の方では思ひきつて猿以來を我祖先とするのでありますから、ソロモンでも、モーゼでも、ソクラテスでも、アレキサンドルでも、基督でも、シーザアでも、伏羲神農でも、堯舜でも、釋迦でも、孔子でも、皆我祖先の光榮ある歴史とするのであります。よしや又それほどの遠方を考へぬにしても、神武天皇を我が祖先と仰いでおけば、何も桓武天皇以下に限つて平家の末流位の歴

史を誇る樣な狹い事をせずとも、藤原の道眞でも、源の朝頼でも、眞田幸村でも、中江藤樹でも、誰でも好な人を我が祖先として、それを光榮ある歴史と思へば善いのであります。斯樣に考へて見ますると、系譜の所有權などゝ申すは只誠に有りがたき權利であります。次に祭具の所有權、是れ將た誠に有りがたき權利であります。私などは無宗教の者でありまして、只「祭ること在すが如くす」と云ふ論語の言葉などが頭の底に殘つて居るのと、子供の時からの習慣とで、毎年盆には佛壇を作つて供へ物など致しますが、蓮の葉や茄などは其度毎に買ふのでありますから別に所有權の何のと云ふ程の事もありません。位牌だけは暫く親讓りのがありましたが、餘り見苦しくなりましたから燒きすてまして、更に新しく作りました。又父母の分は勿論私が作つたのであります。して見ると、祭具など申す者は、我々平民にはトント重みの無い相續物であります。次に墳墓の所有權、是亦實に有りがたき所有權て、是れには隨分重みはありますけれども、誰が來て

横取しようとも氣遣はれません、されば、系譜、祭具、墳墓、是等は殆んど論ずるに足らぬ相續物であります。其論ずるに足らぬ物の爲に、ツイ口が滑つて大分長く喋りましたが、扨いよ〳〵是れからが大事の所であります。

　斯く考へて見まするると、家督相續とは畢竟するに財產の相續であります、即ち親の財產は長子が之を相續すると云ふのが今日の法律習慣であります。所が長子の此の特權がイツも悶着の種になるのであります。私は敢て此特權に反對する者であります。昔の時代には家格、家祿の定めがあつて、それを分ける事が出來ませぬので、誰か一人の相續者を確定しておかねばならぬ、それには自然の順序に依つて長子相續とするが善いと云事になつたのでありましよう。極々昔を見ますると、まだ此長子相續の習慣が確定して居らなんだ事が明かに知られます。神武天皇以後の御歷代の間に幾度も起つた叛亂は大抵相續の爭ひであります。そして兄を差しおいて弟が位に即いた例も隨分にあります。億計、弘計の二王なども、弟の弘計王の方が先に位に即いて居られます。然るに、久しい間の經驗に依つて是れはドウしても相續の順序を確定しておかねば爭ひの絕える時は無いと悟つて、それで追々に長子相續の習慣が出來たのでありましよう。德川時代に及んでは殊にそれらの事が嚴重になつて、家康が竹千代、國千代の兄弟の待遇を異にして、長子と弟との別を明かにした事などは、皆さん芝居で御承知の事と存じます。然るに、代々の智者達がそれほどに苦心して、久しい間の習慣を作つて居るのに、それでも猶兄弟相續の爭ひが殆んど絕間なく起るを見れば、其習慣の底に何か無理があるに相違ない。私の見る所に依れば、兄弟の間にはドウしても同等と云ふ考へがある、其考へを押しつけて長子ばかりに特權を與へるから、ドウしても弟達に不平が起る。如何に永き習慣でも、斯くの如き根本からの不平の念を消す事は出來ぬ。無理は即ちそこに在るのであります。

　今の社會では、昔とは違ひ、家督を相續せずとも獨

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

立の餘地が幾らでもあるので、少し働きのある弟息子ならば、何も親や兄きの財産に目をつける事はありますまいが、それでも生活の競爭は段々烈しくなつて、一方は汗水たらして働いて食ふ、一方は寢ころんで株劵の利子で食ふと云ふ場合には、ヤッパリ不平の念が起らずには止むまいと思はれます。それに今日では、家格の家祿のと云ふ譯では無く、何も長子一人を守り立てねばならぬ必要は無いので、其點から見れば更に弟の要求を強める事になります。

　全體、私の考へでは、毎度申す通り、親は子供を敎育して一人づゝ社會に送り出す、子供はそれ〴〵獨立して銘々に新しき家を作つて行く、是れが將來の親子の關係であります。それで、兄弟の間には年齢の外に何等の差等も無く、長子は只交際上に長者とあがめられる丈の事で、親の財産に對して特權を有すべき筈がありません。若し親の財産に對して特權を有する者があるとすれば、それは長子では無くて、寧ろ未丁年の弟息子であると思ひます。親の死んだ時に、既に獨立

の生活をして居る兄息子等は、何も別に親の遺産を狙ふべき筈はありませんが、其時までマダ獨立が出來ずに親の保護の下に居た未丁年の弟息子等は、せめて其遺産に依つて獨立の資を作らねばならぬ譯であります。

　斯く考へて見ますする時には、長子相續の法は實に人情に背いた事で、家庭の平和を害し、親愛を傷つける者であります。兄弟の間に階級だの特權だの があつてドウして十分の親愛が生じましよう。早い話が、兄息子には鯛を食はせ、弟息子には鮒を食はせて、それて食卓の上が樂しくありましようか。彼等が兎かく喧嘩を始めるのも當然ではありますまいか。

　私は元來、財産を子に遺す必要は無い、子は相當に敎育して社會に突きだせばそれで善いと云ふ說でありますが、それでも折角ためた金を棄てる譯にも行かぬと云ふならば、せめて平等に子供の間に分配して戴きたい、それとも今少し考へるならば、子供の智力と體力とを察して、強い者に少く、弱い者に多く、強弱に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反比例の分配をして戴きたい。そうなれば、せめて親子兄弟の間だけには偏頗なき公平の關係が結ばれて、他日社會全體の公平なる關係の基礎ともなるでありましよう。今日の長子相續の有樣では、先づ家庭において社會の不公平なる關係の基礎を作つて居るのであります。

　更に私の考へを一歩進めて申しまするならば、私は長子相續に反對するばかりで無く、相續其物に反對するのであります。相續と云ふ事は、或は財產に於いて、或は家格に於いて、謂はゆる世襲制度であります。前に申した如く、昔からの智者達が久しい間の經驗を積んで、色々に工夫して見ても、ドウしても無理を免れなんだのは、其根本に於いて世襲制度と云ふ間違つた事を許して置いたからであります。否、其の間違つた事を強いて維持しようとしたので、それで長子相續などゝ云ふ人情に背いた法を定めねばならぬ事になつたのであります。元來、此の世襲制度は我が地位財產を我が子に讓りたいと云ふ私慾心から出たもので、人の子と我が子との間に差別を置いた結果として、遂に我が子の間にも差別を置かねばならぬ事になつたのであります。そこで私は、先づ我が子の間の差別を撤して我が財產は我が子の間に公平に分配する事として、其次には我が子と人の子との差別を撤して、我が子も人の子も等しく社會の子であるとして、我が財產も人の財產も無く、財產は總べて此社會の共有であると云ふ考へに到達したいのであります。

△夫に不正の行爲ありたる塲合

　失禮ではありますが、私は敢てお尋ね申します。今の紳士社會の細君達の中に、「我が夫は如何なる誘惑に遭はうとも決して賄賂を取る樣の男で無い」と斷言（或は確信）し得るお方が何程ありましようか。私は其の甚だ少からん事を信じて深く之を悲む者であります。されば、それらの細君達はいよ／＼夫に不正の行爲があつた塲合に、そも／＼何となられる御覺悟で御坐いましようか。眞逆に多少の身分ある人が、竊盜、强盜、

殺人などの罪惡を犯す場合は極めて稀でありましようが、收賄、詐欺、依托金費消などは此頃の紳士社會に少しも珍らしく無い犯罪であります。細君たる者はドウしてもソレ等に對する平生の覺悟が無くては叶はぬ事と私は考へます。

　全躰夫婦は聯帶責任であります。妻の行爲に對して夫も責任があり、夫の行爲に對して妻も責任がある。それは夫のした事ですもの私は存じませぬ、それは妻のした事で己れの知つた事ぢや無い、などゝは決して言はれませぬ。そも〳〵男女が始めて結婚する時に、惡人を夫に持ち、惡人を妻に持つと思ふ筈は無い、そんな思て結婚する氣になられる筈が無い。必ず善き男を夫に持ち善き女を妻に持つと信じて居るに違ひない。然らば其信の薄らいだ時、或は其信の消えかゝつた時、默つて棄てておく筈は無い。必ず其信を回復する事を計らねばならぬ。

　尤も、初から十分の善き男とも、十分の善き女とも信じ得ずに、止むを得ず結婚する場合もあらう。それ

にしても成るべく善なれと望まぬ人は無いであらう。既に互に善を望む以上は善を信じたと仝じ事であります。ナゼなれば、よしや十分に互の善を信じたとしても、我々凡夫の身で圓滿完全を望む事は到底出來ませぬ。それは人に對してよりも自分の身に就いて考へて見れば善く分る事で、如何に自ら深く信じても、ツイどのような心が起るまいものでなし、善を善をと思ふが中にイツの間にやら惡に傾いて居る事もあります。又其反對に、既に人である以上は、如何に性質の善くない者でも、必ず又どこかに善い所のあるものであります。されば人の性質には必ず善惡美醜の混じて居るものとして、其の惡にして醜なる所を去り、其の善にして美なる所を發達せしめるように勉めるのは當然の事でありましよう。

　そこで夫婦の間においては、二人が既に一躰となつて聯帶責任を持つて居るのでありますから、我が自ら信ずるが如く夫を信じ妻を信ぜねばならぬが、それと同時に又我が自ら危むが如く夫を危み妻を危む場合も

無ければなりません。こゝでは夫に對する妻の覺悟を論ずるのでありますから、すべて妻の地位から見て行く事と致しますが、妻が夫を危むと云へば何やら信が足らぬようで、聊か聞えの惡いような心地がするかも知れませんが、危むが惡いなら氣遣ふでも宜しい、何にしても深く人の身を思ひ、人の身を我身と思ふ場合には、若やコンナ事はあるまいか、ぜひともコウ〳〵させたいもの、と云ふ考への起るは當然の事であります。

女大學流に行けば、女は夫を天と思へと云ふのでありますが、天のような圓滿完全な人があるものではありません。それを天の如く思へと云ふのは無理であります。若し眞に天の如き男がありますならば、少しも疑ふ事なく、少しも危む事なく、少しも氣遣ふ事なく只一隨に其人の命に服從すれば善いのでありますが、天の如き男の無い限りは決して服從ばかりではイケません。今でも從順々々と云つて從順ばかりを女の美德のように云ふ人がありますが(ありますが位では無い、其方が多いようでありますが)それはヤハリ女大學流の系統を引いた男勝手の說であります。勿論、或場合において、例へば深く人を信じた場合、或は約束して人と事を共にする場合等に、或度合までは從順が美德でありますが、從順々々と云つて絕對の服從を女に強いるのは不都合であります。それで、妻が夫に對して或度合まで從順を表するのは勿論美德でありますが、從順が過ぎて服從となり、依賴となり、無氣力となるのは少しも美德ではありません。私の考へでは、凡そ妻たる者は、常に夫を監督し、奬勵するだけの強みを持たねばあらぬと思ひます。我が心中に於いて諸々の私慾私情の起る時、良心の光を明かにして之を消すと同じように、妻は夫の良心となつて光を放ちながら、常に夫の心に起る私慾私情を消してゆくだけの抱負が無ければならぬと私は思ひます。勿論、夫から妻に對すればヤハリ同じ事であります。それで無ければ夫婦が一身全躰とは云はれません。

そこで妻たる者は常に夫の心と行ひとに氣をつけて、監督を怠らず、奬勵を怠らず、それでも面白からぬ事があつた場合には、止むを得ず諫爭する、諫爭と

は諫め爭ふのであります。前號に私が「毅然として動かざる所、凜然として進む所」と云つたのはコヽの事であります。平生こそは溫顏美容、よろづに從順なる細君が、時あつては凜然として夫の前に進み、其の面白からざる行ひの說明を求め、其の宜しからざる心の本を責め、如何に夫が利害を說き情實を並べようとも、毅然として堅く執つて動かず、終に夫の心を翻させて過ちなきを得せしめると云ふに至つて、始めて眞に婦人の美が發揮せられるではありませぬか。眞の婦人の美德とは此事ではありますまいか。

若し斯の如く平生善を責めあつた間柄で、それでも猶一方に過ちのあつた場合は致方が無い、甘んじて聯帶の責任を負ふ、即ち其苦痛を分ち、其不名譽を分つ。尤も、平生如何に諫爭しても少しも聞く樣子が無いと云ふが如き場合、或は全く欺かれて居たと云ふが如き場合には、我が名譽の爲に離婚を請求せねばならぬかも知れませぬ。然しながら、大概の場合には、妻たる者が監督、奬勵、諫爭の意氣抱負を以て夫に對する時には、如何に善からぬ男でも、如何に弱き男でも、其

の心の底の底に潛める善と美とを發揮して、必ず妻に滿足を與へるであらうと私は思ふ。

斯の如き平生の覺悟があつたならば、若夫に不正の行爲があつても、今更驚く事もなく、今更怨む事もなく、甘んじて其運命に服從すれば、又そこに安心が得られるでありましよう。此時こそは服從であります。夫に對してゞは無く、眞の天（或は神）に對してゞあります。

若し是れだけの覺悟もなく、平生只ウカ〳〵と月日を過して、夫に不正の行爲があつたと聞いて、始めてソンナ人かと氣がつき、或は恐れ、或は悲み、或は愛情を盡かして身を退くと云ふが如き細君は、人情の眞味を解せず、人生の尊貴を知らず、イツまで立つても安心の得られる事はありますまい。そして其樣な細君ならば、必ず平生知らず〳〵の間に夫を助けて不正を行はせて居るに違ひない。あゝイツやら無理にネダツテ買つて貰つたアノ帶も其賄賂の金の片われであつたかと、跡で思ひあたつたら、まさか寢覺が善くはあるまい。そこで私は世の細君達に平生の覺悟をお尋ね申して、聊か驚かしまゐらせて置くのであります。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭文庫

△驪語（一名黑馬ものがたり）　是れは欧米の社會に有名なる「ブラック、ビユーチー」の翻譯であるが、ブラック、ビユーチーとは黑美と云ふ意味で、實は馬の名である。それで此書は其馬が自ら其生涯を物語つた自傳躰になつて居る。馬の自傳であるから之を讀めば馬の心持が總べて明かに知られる。どうすれば馬が喜ぶか、どうすれば馬が怒るか、どうして馬が善くなるか、どうして馬が惡くなるか、馬が如何に人を慕ふか、馬が如何に物事を理解するか、要するに此書は如何に馬の愛すべく、敬すべきかを教へて居る。譯者は動物虐待防止會の評議員中で殊に篤志の聞えある本田増次郎氏。左に一節を紹介する。

向ふの注文通りにしないと、サムソンは自分を責め馬場に牽きだして長い手綱でぐる〳〵牽き廻して疲れ果てれば承知しない。……翌朝も早くやつて來て……鞍と手綱と新しい轡をかけられた。……何か自分のした事が氣に障つたと見えて、ひどく手綱で打ちまはした。新しい轡が大變痛くて非常に自分は飛び立つた。それが猶癪に障つてブン擲り始めた。自分もラム〳〵と強腹が煮えて來て、是非になく蹴たり跳ねたり、跡足で飛上つたりして双方揉みあつた。暫くサムソンは鞍にかぢり着いて鞭や拍車で殘酷に自分を罰したが、此方もクワツと血が昇つて來て、どんな目に遇つても落されば承知しないと云ふ氣になつた。とう〳〵恐ろしく悶き苦しんだ上で後ざまに投げ落してやつた。芝生の上にダシンと落さる音に聞いたが、振り向いて見もしないで原の果まで駈けだした。そこから振返つて見ると、自分を苦しめた奴はヨロ〳〵起き上つて廐の方に行つた。櫟の木の下に立つて見て居たが、誰も自分を連れに來ない。段々時は過ぎる。日は暮れる、蠅はたかつて拍車で擦れて血の出る横腹を苛める。早朝から何も食べないので腹はすいても、牧場には鵞鳥一羽を養ふ程の草もない。横になつて休まうと思へば鞍がきびりつけてあるので躰が樂にならぬ。飲む水と云つたら一滴も無い。午後も過ぎて日は西に落ちる。外の小馬は牽き入れられる、定めて御馳走を戴く事だらう。

やつと日の沈む頃、老主人が手に篩を持つて來るのが見える。眞白髮の立派な紳士で、其間と云つたら千人の中でも直ぐに聞き別けられる、高からず低からず、凛とした涼しい親切な聲て、何か云ひつけられると、人間でも馬でも從はねば居られぬほど、落ちついたシツカりした聲である。さて此老人が靜にやつて來て、折々篩に入れて來た麥をゆさぶりながら「サアお出で嬢や、サーお出で嬢や、サー、サー」と、やさしく機嫌よく話しかけた。自分はぢつと立つて待つて居ると麥を私にのぞける。自分は恐れずに食べ始める。其親切な聲で恐さが逃げてしまつた。側に立つて私が食べてる間に撫でたり擦つたりして、横腹に血の塊りが着いて居るのを見て大層心痛の躰である。「可愛さうに、非道い目に遇つたわい、非道い目に」と云ひて、靜かに手綱を取つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て自分を厩に牽き入れた。丁度戸口にサムソンが立つて居たから、自分は耳を後に立つて怒鳴りつけた。サムソンは癖の悪い畜生とか何とかブツ／＼云つた。父は又「能く心得て置きなさい。性の悪い人間が馬の性を善くする事は決して出來ない。サムソン、お前はまだ馬を扱ふ法を知らないのだ」

△結核征伐（醫士佐竹音次郎著）　家庭文庫としては少しおかしいかも知らぬが、予は敢て此書を諸君に推薦する。肺結核に關する智識を得たいと思ふ者、其の養生法を知りたいと思ふ者、又其病の間に安心を定めたいと思ふ者には、此書は最も善き友である。其文章に氣と熱との多き事は、「結核征伐」と云ふ名からして想像せられる通りで、其記述の順序も頗る整頓して、更に一歩を進めて普通の醫學以上、精神的の領分にも入りかけて居る。殊に此書の著者は相州腰越に小兒保育院を設けて居る篤志家であつて、此書は其小兒保育院の費用の一部を辨ずる爲に出版されたものである。予は其點に於いて又一層の同情と尊敬とを此書に拂ふのである。讀者諸君若し志しあらば佐竹氏の爲に、否氏の下に保育せらるゝ多くの不幸なる小兒の爲に、此書一冊を買ひ玉はれ。此書の附錄には「保育みやげ」及び「相州腰越小兒保育院（枯川生記）」等の文字があつて、佐竹氏の爲人と保育院の成立とを示して居る。定價及び發行所等は本誌の廣告にて御承知を乞ふ。

前金切の注意

本誌第壹號（或は第貳號）より半年分前金にて御注文の向は前號（或は本號）限りにて前金切れと相成りますにつき、成るべく早く次の前金御拂込を願ひます。御拂込なき向へは止むを得ず次號の發送を見合はせます。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

醫士佐竹音次郎著

結核征伐

定價廿五錢　郵稅四錢

此書は肺結核の如何に恐るべきかを說き、如何に之と闘ひ、如何に之に勝つべきかを教へたる者なり、健全なる人は豫防の爲に一讀の必要あり、不幸なる患者は安心の爲に熟讀の價値ありと信ず（家庭文庫欄參照）

發行所　相模國腰越　**小兒保育院**

雜誌 **社會主義**

每月二回三日十八日發行。一部七錢（郵稅不要。）三ヶ月分四十錢。切手代用一割增（五厘）。

日本に於ける社會主義の機關雜誌として最も古く最も奮闘する者は本誌也。最近刊第七年第廿號（九月十八日發行）要目左の如し。

▲獨逸社會黨の勝利が與ふる教訓（西川生）▲四國九州遊說雜感（片山潜）▲長屋の朝顏（兒玉花外）▲米國軍艦に於ける日本人（渡米案內）▲**濃飛育兒院の大罪惡**（社會の裏面）▲四國九州遊說日誌▲社會講談大鹽平八郎（小塚空谷）▲社會主義小樂園等

片山潜著

我社會主義

再版・發賣

全一部　定價二十五錢　郵稅四錢

好評嘖々、忽ちにして再版を發行したり。

發行所　神田區三崎町三丁目一番地　**社會主義圖書部**

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

横井玉子女史著（寫眞版八枚入菊判洋裝全一冊）

（三版）

家庭料理法

上製 金六拾錢 郵稅拾錢

並製 金四拾五錢 郵稅金八錢

三度〳〵の食物を安く旨く且つ輕便に味はんとするには、一通りの料理鹽梅を心得置かざるべからず。本書は故横井玉子女史が多年の經驗上より、四季折々の日本料理、西洋料理、もしくは折衷料理など、有合せの器具にて購ひ易き原料を用ひ、好むがまゝに試み得べき最も輕便なる諸種の調理法を、極めて親切に通俗に詳記したるもの、固より坊間濫出の料理書類とは其の選を異にす、蓋し一般家庭に於ける厨の寶典也。

下田歌子先生著

家政學講義

定價金四十五錢 第三版

郵稅金六錢 發行

冨山房

賣捌各地書林

堺枯川著

家庭の新風味

全六册合本

著者は此書が多くの新婚の人に讀まれんことを望む。
著者は此書が多くの將に結婚せんとする人に讀まれんことを望む。
著者は又此書が多くの中年の人及び老年の人に讀まれんことを望む。
要するに著者は此書が多くの家庭文庫に備へられんことを望む。

合本全一册　割引價八十錢　郵税八錢

取次所　東京市京橋區新港町一丁目十七番地　由分社

(目次は表紙の第二頁に在り)

●家庭雜誌目錄

▲第壹號　(四月三日發行)
▲本紙の特色▲我輩の根本思想▲動物虐待防止會▲ユトピアの話▲イソプ教訓談▲家庭文庫の必要▲古書新書▲娘の學ぶべき事▲僕にもオバアさんが欲しい(讀切小說)▲倫敦の日本料理▲編輯及發行事情等

▲第貳號　(五月二日發行)
▲茨の花(漫吟)▲子なき人に與ふる書▲老人問題▲家庭の消息▲海豹と人との交(書入)▲梟の一家族▲(滑稽書)▲偶感▲夕日岡園遊會の記▲菊坊のお話等

▲第參號　(六月二日發行)
▲新天地(漫吟)▲隅田川邊の好家庭▲ワシントン及其母(肖像)▲鼠の失策(滑稽書)▲偶感▲讀者の顧問▲樂しき生活▲結婚離婚の統計▲天文の話▲家庭の消息▲匆々一筆等

▲第四號　(七月二日發行)
▲三つ子の感化力(讀切小說)▲不二彥(肖像)▲柿山伏(狂言)▲猪とクヅ鹿(滑稽書)▲偶感▲讀者の顧問▲樂しき生活▲加藤邸晚餐會の記▲倫敦雜話等

▲第五號　(八月二日發行)
▲子供の導き▲細君の說法▲小猫の生理(書入)▲新案四頭立犬車(滑稽書)▲望みと疑ひ▲苦痛と不平▲ウソツキ卯太郎▲夫婦の孰れが多く貞實なるか▲世界奇聞▲一口話▲「まだ見ぬ親」梗概等

▲第六號　(九月二日發行)
▲百年後の新社會(ベラミーの名著ルッキング、バックワードを縮譯して社會主義の理想を具躰的に(小說の形にて)示す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英國スウエル女史原著
高等師範學校教授　本田增次郎譯

驪語

くろうまものがたり

クロス製美本　定價八十錢　郵稅六錢

此書の原本は歐米の**家庭**にて最も廣く**愛讀**せらるゝ書物でブラック、ビューテイといふ名馬の自叙傳である。書中紳士觀あり淑女觀あり家庭改良の論もあり社會公德の談もありて馬の觀察主張であるだけに**興味津々**として湧くが如くである。譯文は極めて**平易流暢**なる言文一致體で而かも馬が人に話すやうに禮義ある詞遣ひをして其の上に十二度刷の美くしい**彩色畫**をも加へてあるから如何なる家庭にも歡迎せらるべき資格がありて且つ幼年少女への**贈物**としては極めて**淸い有益な品**である。

家庭之友

十月三日發兌　**第七號發行**　見本郵稅六錢

定價一冊**五錢**　郵稅五厘　一ヶ年十二冊**六拾錢**　郵稅共

初號より取揃へて注文に應ず（但し申込**至急**を要）

中央新聞記者　加藤眠柳著

女子立志編

上製總クロス　定價金拾五錢　郵稅六錢
並製　價二十錢　郵稅四錢

日本の婦人社會は、最近數年間に於て著るき變調を現はし來り、其團體的運動の如き漸く世人の注意を惹かんとするに至れり。然れども日本婦人は今尚社會の勢力なりと認識せらるゝに至らず、隨て其社會の進歩に貢獻せる女流の如き尚甚だ多からざるが如し。『英國士道物語』の譯者眠柳加藤米司氏、今回**泰西の名媛十有九家**を傳して世に出せり。編中詩人あり小說家あり、畫師あり、新聞記者あり、彫刻家あり、說教家あり、慈善家あり、旅行家あり、社會改良家あり、ウィラード女史ならざるも皆これ**無冠の女皇**にして其言其行其人其德すべて皆欽仰すべきなり

婦人及び家庭の最好最良の讀本也

傳記書類

● 吉川曾水著　チェンバーレン　價二十錢　郵稅二錢
● 山田美妙著　アギナルド　價五十錢　郵稅六錢
● 坂井久良伎著　明治畸人傳　價廿五錢　郵稅不要
● 松村巖著　新撰組長近藤勇　價廿五錢　郵稅不要

教訓書類

● 加藤眠柳譯　英國士道物語　價卅五錢　郵稅四錢
● 少年園譯　人道教育論　定價八錢　郵稅二錢
● 落合浪雄譯　婦女小訓　價二十錢　郵稅不要
● 久津見蕨村著　立志小觀　價十五錢　郵稅不要
● 宮崎右夫落　貧の朋友　價十五錢　郵稅二錢

出版元　東京神田區南甲賀町八番地　電話本局三千二百四十六番　**內外出版協會**